

### 着任に際して



川崎 雅裕 (ビッグバン宇宙国際研究センター)  
kawasaki@resceus.u-tokyo.ac.jp

4月15日付で理学系研究科附属ビッグバン宇宙研究国際センター教授として着任しました。専門は宇宙物理学で、特に素粒子的宇宙論と呼ばれる宇宙誕生間もないごく初期に宇宙に何が起こったかを素粒子物理のアイデアを使って理論的に探るといふ研究をしています。

私が所属するビッグバン宇宙研究国際センターというのは今年の4月に発足した専任のスタッフが4人というとても小さなセンターで、まだ発足して間もないためいろいろことが整ってなく、試行錯誤しながらやっている状態です。しかし、このいろいろなことが整ってないというのは、実は楽しい状況で他のスタッフとともに新センターを立ち上げて立派なものにするという大仕事に参加できるのですから新しい物好きの私にとってはむしろ好運だと言える訳です。

これまでの人生(少し大げさですが)を振り返ってみると、いくつかの好運の巡り合っていることを感じます。東京大学理学部の学部学生だったころ、たまたまワインバーグという素粒子物理学者が書いた「宇宙創生はじめの3分間」という一般向けの解説書を読んで宇宙に興味を持って宇宙の研究をしてみたいと漠然と思い始めました。しかし、そのころ残念ながら物理教室には宇宙論を専門とする研究室が無かったので素粒子でもやろうかな(素粒子の先生方、当時は何も知らない学生だったので生意気な言い方でごめんなさい)と考えていました。と

ころが、3年生の終りごろになって京都大学から佐藤勝彦先生が助教授として着任されて物理教室に宇宙論の研究室ができることになったのです。この好運のおかげで私は大学院で佐藤研究室に入って念願の宇宙の研究ができるようになったのです。その当時宇宙論の分野ではインフレーション宇宙理論などに代表される素粒子の新しいモデル(大統一理論等)と宇宙の進化を組み合わせることが盛んに研究されていて素粒子の研究者の中にも宇宙を研究対象にする方が多数いました。私もこの素粒子と宇宙の境界領域(素粒子的宇宙論)に非常に興味を持ち、ニュートリノという素粒子と宇宙論の関わりを研究することになりました。

素粒子的宇宙論を研究していたおかげか、運命の悪戯か、学位を取得した後東北大学理学部物理教室の素粒子論研究室の助手に採用されることになりました。関係が深いとはいえ宇宙論の分野とは基礎知識や価値観が異なる素粒子物理の分野の人達に囲まれて大変戸惑った覚えがあります。これも、今から思うと大変な好運であったと言えるもので、素粒子の知識を学び、素粒子の研究者と親密な交流をする絶好の機会を得ることができ、ますます、素粒子的宇宙論の研究の深みにはまってしまうことになりました。

その後、東京大学宇宙線研究所を経て、ビッグバン宇宙研究国際センターの1員になった訳です。センターの研究目的は宇宙をその創生から現在に至る進化を統一的に理解すると言うことで、これは私自身のこれまで研究の大きな目的でもあるので、自分自身の研究を進めて行くに最適の場所だと喜んでいました。これからはセンターの発展のために物理・天文教室と協力しつつ研究・教育に専心努力して行きたいと思いますので、よろしくお願ひします。

## 人類学とフィールドワーク



近藤 修 (生物科学専攻)

kondo-o@biol.s.u-tokyo.ac.jp

幸運なことにこのデデリエ洞窟は人骨の発見が非常に高率で望める遺跡でありまして、すでに埋葬人骨2体（幼児骨）と成人骨が発見されています。旧石器のともなう洞窟遺跡はこの地方にはかなりの数がありますが、人骨の発見される遺跡となると簡単ではありません。実際、過去に多くの人類学者がこの時代（中期旧石器）の人類化石（ネアンデルタール人類など）を目指して洞窟遺跡の発掘を行い、最終的に人骨は発見されないままであるのが実情です。私などは幸運にも最初の洞窟で人骨にめぐりあい、その形態学的研究に携わることができました。

この調査にともなう研究では人骨の形態学的研究をおこなうことになっていますが、実際の調査では人的資源に限りがあるので、私のような素人も実際にブラシと竹べらを手に持って発掘に携わります。また、調査だけでなく、毎日の生活における物資調達やシリアサイドのカウンターパート、現地調査員との交渉など、普段の大学での暮らしでは経験することのない刺激的な毎日を経験しています。調査隊は、日本、シリア、フランスからの研究者、学生による混成部隊です。現地の調査員はこのあたり一帯がクルド人居住地域であるため、ほとんどがクルド人です。したがって洞窟の中では、日本語、英語、フランス語、アラビア語、クルド語が飛び交い、時としてパニック状態になりますがこれもフィールド調査での醍醐味のひとつでしょうか？

実はこの原稿もシリアのベースキャンプで暇を見つけて書いています。毎日の作業の中で人骨が発見されることはほとんどなく、私にとっては我慢の日々が続いていますが、新しい化石を1個見つけることによって開ける新しい展開は、他の何物にも代えがたいものです。それだけに、人類学の分野では避けておれない仕事であり、今後も続けていくことが重要だと考えています。

7月1日付けにて東北大学より転任してまいりました。私は1992年に大学院理学系研究科の修士課程を終了しておりますので7年と少しの間、東大を離れていたこととなります。この間、札幌医科大学、東北大学医学部と解剖学教室にお世話になり、人体解剖の教育をするとともに自分自身の研究をしてまいりました。本郷に戻ってみると、本郷通り沿いにも新しい店舗が立ち並び、学内も大学院重点化などで名前、組織などがいくぶん変わっていましたが、理学部2号館のいささか古ぼけた、しかし赴きのあるたたずまいは依然、不変であり、懐かしい感じがいたします。

広い人類学の学問分野の中で、私は人骨の形態学的研究を専門としてきました。とくに、古人骨の形態を通じて、その人個人、あるいはその集団レベルにおける進歩史、生活史を復元することに興味を持って研究しています。日本人の歴史に関連する範囲では、頭蓋形態からどこまで集団差に関する分析が可能であるか？という命題に関連して、関東地方縄文時代人の頭蓋形態にもとづく地域差、北海道アイヌの地域差を研究してきました。視野を広げた現代人の起源に関連するレベルでは、中近東のシリアにおける中期旧石器時代遺跡・デデリエ洞窟の発掘調査に学生時代より参加してきました。この調査団は、以前、鈴木尚先生（現東大名誉教授）がはじめられた西アジア調査団の流れを受け継いで、シリア北部アフリン地方の旧石器時代遺跡の調査を継続しています。私はこの調査団に1990年より参加しているのもう10年になり、隊長の赤澤教授（国際日本文化研究センター）の次に長いメンバーになってしまいました。